

令和 2 年 4 月 30 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02450

研究課題名（和文）自己保存と自己実現の修辞 アンドリュー・マーヴェルの敵と友

研究課題名（英文）The Rhetoric of Self-preservation and Self-realization: Andrew Marvell's Enemies and Friends

研究代表者

吉中 孝志 (Yoshinaka, Takashi)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：30230775

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）： 詩人としてのマーヴェルにとって、忠誠心や義務感は、国家的なものやイデオロギー的なものであるというよりもむしろローカルで個別のものであり、彼の立ち位置は、家族関係や、社会的、文学的な有縁性の人脈の中にある。その顕著な例として、マーヴェルは、フェアファックス卿の長老派の家庭の中で執筆しながら、終末論的錬金術のイメージを、距離を取った超党派的な使い方をしているという事実を引用してよからう。また、彼の旧友である王党派、第二代バッキンガム公爵ジョージ・ヴィリヤーズと議会派の退役軍人である当時の自らの雇い主の娘、メアリーとの縁談を纏めるための積極的な責任を負っていることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今世紀最強の批評潮流といえる新歴史主義の影響を受けた英国17世紀文学研究は、政治的、イデオロギー的な観点からテキストを解釈する傾向が強かった。マーヴェル研究もその例外ではなく、詩人の政治的、宗教的立ち位置が常に問題とされてきた。本研究成果の学術的意義は、個別の人間関係や人脈を調査することで歴史の特定の地点と特定の時点において詩人が自らの敵と友との間で自己保存と自己実現を試みた具体例を発見したことである。また、極めて専門的な研究成果の副産物として、言葉を操る人間が、敵と味方との間を如何に生きてゆくべきか、言葉によってどのように人間関係をうまく生きることができるかの知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）： For Andrew Marvell as a poet, his allegiance and obligations were more local and particularist than national and ideological, and his position was situated within a network of family relations and social and literary affinities. We may cite as a remarkable example the fact that Marvell, writing in the Presbyterian household of Lord Fairfax, employs the chiliastic and alchemical imagery in a distanced, nonpartisan way. It is also discovered that Fairfax's poet took upon himself a positive responsibility for arranging the marriage between his old Royalist friend, George Villiers, Second Duke of Buckingham and Mary, the daughter of the retired general of the Parliamentary force, and Marvell's employer at that juncture.

研究分野：イギリス文学

キーワード：マーヴェル 17世紀 イギリス バッキンガム公爵 フェアファックス卿 庭

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

21世紀に入ってそのテキスト環境が大きく整備されたマーヴェル研究において、今まで知られていなかったマーヴェルの人脈と文学作品との関係が明らかにされる準備が整ったと言える。歴史主義的かつ実証主義的なこの活発な国際的研究動向を受けて、吉中孝志は、英国の Boydell & Brewer 社から出版した *Marvell's Ambiguity: Religion and the Politics of Imagination* (2011) において、マーヴェルと The Great Tew Circle と呼ばれた同時代の聖職者や詩人たちのグループとの人脈を明らかにし、詩人たちが個人間でどのような友好関係や敵対関係を結んでいたか、そしてその個人的な人間関係が言語表現にどのように影響を与えていたかを解明していく本研究の端緒を作った。さらに、平成23年度から平成27年度の5年間、科学研究費の補助を受けて吉中孝志が行った「アンドリュー・マーヴェル研究 人間関係と表現技術」では、John Hall や 2<sup>nd</sup> Duke of Buckingham らとの人間関係がマーヴェルのテキストに影響を及ぼしている具体例を発見し、一定の成果を得た。

### 2. 研究の目的

(1) Andrew Marvell (1621-78) のテキストは、それが生成された時点での彼と彼を取り巻く他者との複雑な人間関係が織り成したものだといえる。本研究の目的は、17世紀英国の政治、宗教的な激動の時代の中枢に生きたマーヴェルの交友関係と敵対関係を考察することによって、それぞれの作品制作時点での人脈がどのようにテキストに影響を与え、またテキストがどのように人間関係を形成する働きをしていたかをさらに明らかにすることである。特にこのたびの研究が試みようとしたのは、前段階での研究が果たしえなかった 脱イデオロギーな関係構築を可能にすると仮定される、庭という場所を媒介として、これも前段階で未消化となった Philip, fourth Baron Wharton (1613-96) を含む、人間関係をマーヴェルの文学テキストと合わせて解明することである。極めて専門的な研究成果の副産物として、言葉を操る人間が、敵と味方との間を如何に生きてゆくべきか、言葉によってどのように人間関係をうまく生きることができるとの具体的な知見を得る。

(2) マーヴェルの周辺には、本研究の前段階で調査した John Hall のように、有縁性や忠誠の責務を生じさせる要因が政治的、イデオロギー的なものであるよりも、むしろ個別の交友関係や家族関係、地域的な、もしくは経済的な利害関係であることが想定される人物が複数存在する。政治的な混乱や宗教的な教義論争の結果、敵対関係や親和関係が発生するとすれば、詩作品を含む芸術活動は、その二項対立の状態を超越、融和、もしくは逃避するための手段として機能した可能性がある。本研究ではその「敵と友」を超える超党派的人間関係が「庭」という場所によって醸成されるという仮定のもとで、「庭」そのものの持つ本源的性質を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) マーヴェルが、人間関係を調整する際に使った詩という表現方法は、人間精神の植物や花との接し方と密接に関わっているのではないかという仮定を実証主義的に証明するために、作詩と作庭の共通項を探る試みをおこなった。具体的には、現存する、もしくは復元された18世紀、19世紀初頭の庭を实地調査し、17世紀の造園関係資料を精査した。

(2) マーヴェルの人脈に関する歴史資料の基点としては *Oxford Dictionary of National Biography* を用い、一次資料を所蔵する図書館等での閲覧調査を行いつつ、周辺人物のそれぞれの宗教的、政治的な立ち位置や具体的な言説とマーヴェルの特定のテキストとの相互影響関係を考察した。広島大学で利用可能となった Early English Books on Line を用いると共に、特にオックスフォード大学ボドレアン図書館所蔵の手稿 (the Wharton papers) を閲覧調査し、アメリカで毎年3月に開催される South Central Renaissance Conference の分会である The Marvell Society に参加し、英米のマーヴェル研究者と意見交換を行うことで研究目的を達成しようとした。当初、想定していたように、ウォートン卿関連の資料調査の過程や国際学会での意見交換の過程で、予期しなかった人物との接点や新たな影響関係の可能性が浮上したため、研究対象人物を修正しつつ、一定の成果が出るような方法をとった。具体的には、1640年代のマーヴェルとの接点として、寛容主義の観点から、The Great Tew Circle の構成員との関係を含め、ウィリアム・ハピントン (William Habington, 1605-1654) と 第二代バッキンガム公爵の両名に関する、より詳細な調査が必要になったため、前者に関しては、当該人物の研究者、Robert Wilcher 氏の知見を求めて Henry Vaughan Association Colloquium に参加するとともに、Helen Wilcox 等の英国17世紀文学の研究者と意見交換を行ない、後者に関しては、本研究期間中に出版された *The Oxford Handbook of Andrew Marvell* (2019) 所収の Martin Dzelzainis の研究成果である 'Marvell and Science' 等の論文の精査を行った。バッキンガム公爵とマーヴェルとの関係に関して Dzelzainis の発見した事実は、ほぼ王政復古後のものであることから、マーヴェルの傑作である 'Upon Appleton House' 内のテキストと人物関係との相互関係を明らかにするため、*Fairfax Correspondence* を含めた調査を行うことで、新たな知見を得ることを試みた。

#### 4. 研究成果

(1) 作詩と作庭の共通項として、また良好な人間関係を強め、自己保存と自己実現を達成するための具体的な一つの装置として、「隠しておいて驚かせる」造園方法に注目した結果、以下のような知見を得た。まず、18、19世紀の作庭術の中で、庭の中で突然、廃墟が目の中に飛び込んでくるような配置が、例えば、Richard Hill (1732-1809) が作った、シュロップシャーのホークストン・パークでなされていたこと、また、ワーズワスが、1824年に訪れたランゴレンの Plas Newydd の庭では、木陰から Castell Dinas Bran の廃墟が飛び込んで来るように、回遊者の視線を導くような造園が成されていたこと、等々が判明した。そしてこれら実地調査による庭園史における個別の発見は、それらを17世紀の庭園詩に逆照射することによって、マーヴェルの代表作 ‘Upon Appleton House’ がその構成上、一種の回遊式庭園の仕掛けを利用しているという仮説を証明する一つの証拠となるとともに、その心理的な機能が、最終目的としては、Fairfax 家族、特に Thomas Fairfax 卿との友好関係を強化することに資するためであったことが明らかになったと思われる。

本研究の主目的であるマーヴェル研究という観点からは、副産物といえる成果ではあるが、18、19世紀の詩作品を対象とする研究成果として、関西コールリッジ研究会での口頭発表を経た後、『表現技術研究』に掲載された『「驚き」の詩学とワーズワスの庭』がある。

さらにこれを本研究の主目的であるマーヴェルの人間関係と彼の詩作品についての解釈に援用した研究成果として、単著『花を見つめる詩人たち マーヴェルの庭とワーズワスの庭』（2017年、研究社、総ページ数400頁）を上梓した。これは、科学研究費・研究成果公開促進費（学術図書）17HP5057を交付されており、『英語年鑑2019』の「回顧と展望：イギリス詩」では、「作者と読者の個人的な体験という読書行為の原点に回帰」する研究手法が絶賛され（17頁）、また、17世紀英文学会の公式HPの書評では「見落としがちな詩の言葉・・・が示す意味と意義」の発見が高い評価を受けている。特に、第3章では、マーヴェルの、いわゆる「女嫌いの庭」の原因を、同時代の女性嫌悪の言説、さらにマーヴェルのパトロンであったフェアファックス家の歴史的かつ私的な状況の中に見出した。

(2) 現段階では、間テキストレベルの接触到すぎないが、マーヴェルとウィリアム・ハピントンとの関係を発見することが出来た。少なくとも、両者が共通の詩的伝統の中で、詩人たち同士の同じ、もしくは近接したグループ内で、書いていることを示唆する例である。例えば、Habington: ‘All those bright jems, for which ith’ wealthy Maine, / The tann’d slave dives’ (p. 42, ‘To the Right Honourable, the Lady, E.P.’, lines 8-9). Marvell: ‘The Indian slaves / That dive for pearl through seas profound’ (‘Mourning’, lines 29-30). Habington: ‘The worlds great eye / Though breaking Natures law, will us supply / With his still flaming lampe: and to obey / Our chaste desires, fix here perpetuall day.’ (p. 43, ‘To Castara, Departing upon the Approach of Night’, lines 9-12). Marvell: ‘though we cannot make our sun / Stand still, yet we will make him run.’ (‘To His Coy Mistress’, lines 45-46). Habington: ‘O let us sympathize, / And onely talke ith’ language of our eyes, / Like two stares in conjunction.’ (p. 50, ‘To Castara. Of the Chastity of his Love’, lines 7-9). Marvell: ‘Therefore the love which us doth bind, / But Fate so enviously debars, / Is the conjunction of the mind, / And opposition of the stars.’ (‘The Definition of Love’, lines 29-32). この知見を含む研究成果は、『十七世紀英文学における生と死』（2019年、金星堂）に論文「ウィリアム・ハピントンのコスミック・エスケイピズム」として発表済みである。

(3) 本研究の最も大きな成果は、庭という場所を媒介として、前段階で未消化となっていた Philip, fourth Baron Wharton (1613-96) を含む、王政復古期の人間関係をマーヴェルの文学テキスト、特に1640、1650年代に執筆された詩作品の生成過程に逆照射することに成功したことである。具体的には、ウォートン卿の息子の縁談にマーヴェルが深く関わっていたように、フェアファックス卿の娘の縁談に関わっていた強い可能性を、‘Upon Appleton House’ 執筆時点での第二代バッキンガム公爵とマーヴェルとの関係を詳細に論じることで明らかにした。イギリス内乱を経て、クロムウェルと亡命中のチャールズ2世との狭間で、一種の二重スパイ的な役割を果たしていたことさえ想定されるマーヴェルのカメレオンの表現技術についてさらに研究を進める出発点ともなる知見である。国際学術雑誌 *The Seventeenth Century* に掲載予定の論文 ‘Eschatological Alchemy in Henry Vaughan and Andrew Marvell’ は、2020年5月オンライン公開される。

(4) マーヴェルの人脈形成に大きな影響を及ぼした The Great Tew Circle に属する人々の思想体系には、懐疑主義に基づく寛容精神があることは既に明らかであるが、17世紀前半の思想史における、そしてマーヴェルのテキストにもその痕跡が色濃く残っている作家の一人であるモンテーニュの著作を精査する過程で、本研究のもうひとつの副産物的な発見があった。これは、17世紀の演劇作品、John Webster の *The Duchess of Malfi* の演出に関わるもので、ウエプスターのモンテーニュからの多くの言語的な借用にもう一つの興味深い事例を加える結果となった。これについての論文 ‘Where Did Julia Sit?: Another Borrowing from Montaigne in John Webster’s *The Duchess of Malfi*’ は、*Notes and Queries* 誌で発表される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

|  |                          |
|--|--------------------------|
| 1. 著者名<br>吉中孝志   | 4. 巻<br>14               |
| 2. 論文標題<br>「驚き」の詩学とワーズワスの庭   | 5. 発行年<br>2019年          |
| 3. 雑誌名<br>表現技術研究   | 6. 最初と最後の頁<br>(1) - (30) |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし   | 査読の有無<br>無               |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)  | 国際共著<br>-                |
| 1. 著者名<br>吉中孝志   | 4. 巻<br>19               |
| 2. 論文標題<br>ウィリアム・ハintonのコズミック・エスケイピズム  | 5. 発行年<br>2019年          |
| 3. 雑誌名<br>『十七世紀英文学における生と死』   | 6. 最初と最後の頁<br>43-69      |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし   | 査読の有無<br>有               |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)  | 国際共著<br>-                |
| 1. 著者名<br>Takashi Yoshinaka  | 4. 巻<br>-                |
| 2. 論文標題<br>Where Did Julia Sit?: Another Borrowing from Montaigne in John Webster's The Duchess of Malfi | 5. 発行年<br>2020年          |
| 3. 雑誌名<br>Notes and Queries  | 6. 最初と最後の頁<br>-          |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1093/notesj/gjaa052   | 査読の有無<br>有               |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)  | 国際共著<br>-                |
| 1. 著者名<br>Takashi Yoshinaka  | 4. 巻<br>-                |
| 2. 論文標題<br>Eschatological Alchemy in Henry Vaughan and Andrew Marvell                                    | 5. 発行年<br>2020年          |
| 3. 雑誌名<br>The Seventeenth Century  | 6. 最初と最後の頁<br>-          |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1080/0268117X.2020.1746925  | 査読の有無<br>有               |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)  | 国際共著<br>-                |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>吉中孝志                                |
| 2. 発表標題<br>忘れられた詩人たち ウィリアム・ハピントンのコズミック・エスケイピズム |
| 3. 学会等名<br>日本英文学会中国四国支部大会                      |
| 4. 発表年<br>2018年                                |

|                              |
|------------------------------|
| 1. 発表者名<br>吉中孝志              |
| 2. 発表標題<br>驚きの詩学とワーズワスの庭     |
| 3. 学会等名<br>関西コールリッジ研究会（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2017年              |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Takashi Yoshinaka                             |
| 2. 発表標題<br>Henry Vaughan and William Wordsworth          |
| 3. 学会等名<br>The Vaughan Association 24th Colloquium（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2019年  |

〔図書〕 計1件

|                                     |                 |
|-------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>吉中孝志                      | 4. 発行年<br>2017年 |
| 2. 出版社<br>研究社                       | 5. 総ページ数<br>373 |
| 3. 書名<br>花を見つめる詩人たち マーヴェルの庭とワーズワスの庭 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|